

「社会の発見」とその影——シンポジウム雑感——

荻部直

日露戦争の「戦後」にはじまる、「大正的」な思想状況について、その重要な特徴を「社会の発見」ということに見たのは、飯田泰三氏である（「吉野作造——ナショナル・デモクラット」と『社会の発見』一九八〇年、のち『批判精神の航跡』、筑摩書房、一九九七年に再録、二〇五―二〇九頁）。

つまり、明治時代が、国家（ネーション）の独立という事業とのかかわりで、人々が個人としてのみならずを強く意識していた時代だとすれば、大正期には、そうした精神のあり方が深い懐疑にさらされ、解体してゆく。国民としての強固な一体感と、それに支えられ確固とした自我の意識は、日露戦争でいったん盛りあがったナショナリズムが戦後に弛緩する中、大きく崩れさっていった。

そして、普通選挙運動・労働運動・農民運動といった、さまざまな集団活動が、多くの対立をひきおこして、国家とは別に運動する「社会」の独自の動きを、知識人に実感させる。この動向が、大正時代における「社会の発見」にほかならない。

こうした、いわば「国家」から「社会」へ、という思想動向は、これに続く時期、一九三〇年代・四〇年代に關して近年よく指摘される、「総動員」や「総力戦」の思想といった特質とも、密接に関連している。このことについてはすでに、一九八〇年代初頭から、藤田省三氏による指摘があった。その議論によれば、日露戦争ののちに、社会構造の変容に対応しながら、「天皇制国家」

が再編され、新たな抑圧構造としての「天皇制社会」が生まれた。それは、「各種・各レベルの集団における、それぞれの一体感が割れて個性性がその中から分出することへの恐怖」によって支えられた、同質性を旨とする全体社会であり、その社会がまるごと過激な「運動」へと転化した結果が、太平洋戦争であったという（藤田省三著作集『第一巻、みず書房、一九九八年、一三二、二九八頁）。

しかし、日中戦争・太平洋戦争期の強権支配と侵略戦争の歴史としてのみ、大正期の思想を位置づけるのは、もちろん適切ではない。ここに挙げた「社会の発見」という特質にかかわる事柄を見るだけでも、たとえば、いろいろな社会集団が自立して組みあげる新たな秩序の構想、自我と外界との新しい関係づけ、家族やセクシュアリティをめぐる言説、現実を背後から支える「生命」の探求など、知識人はさまざま問題をめぐって、盛んに議論をたたかわせていた。そのような言説状況がもっていた、豊かな広がり、可能性とを無視するならば、大正時代の思想の評価は、大きくゆがんだものになってしまう。

このたびのシンポジウムにおける、三つの報告は、それぞれ独自の角度から、この「社会の発見」という問題をとり扱ったものと位置づけることができるだろう。ま

ず黒川氏の報告は、大山郁夫が、「国家」「国民」を重視する当初の立場から、「社会」「階級」を基本の枠組として現実を分析し、理想を追求する視座へと転換した道筋を明らかにしている。まさしく、明治の「国家」の時代が終わり、大正の「社会」の時代が到来する変動を、大山は全身で感じとり、その思想に反映させていたのである。

また、「社会の発見」は、他面で同時に、個人の自我の内部にかかわる、深い危機意識ともなっていた。これまで、周囲と隔絶し、離れたところから現実を観照するものとみずから思っていた自我は、実はその根柢のところ、他者や外物とのかかわりによって深く決定づけられている。そうした、自我にとつての「社会の発見」とも言うべき思想状況を、アナキストたちに関して明らかにするのが、板垣氏による報告であった。その分析で用いられる、「自発」と「埋没」、「内在」と「超越」といった座標軸は、自我と環境との関係を、それぞれの思想家がいかなる深度で自覚し、社会実践といかに関係づけていたのかを、整理するためのものにほかならない。本誌掲載の論文では、シンポジウムでの報告に、丸山眞男の論文「忠誠と反逆」への言及と、「自発」「埋没」の分析軸とが加わり、その趣向がいつそう明らかに

なっている。

さらに、「国家」から分離し、独自の動きを示すものとして「社会」を対象化する視線は、従来の国民国家の国境を超えて結びあう、人々の動きへと向かってゆく。和田氏の報告は、徳富蘇峰や永井柳太郎らが、中国における革命と、日本国内における改革の展望とを、間近に結びつけていたことを明らかにしている。これは、「社会」の運動が、国家の境界を超えて交錯する可能性を、鋭く感じとったものと解することもできるだろう。一九二〇・三〇年代の思想における、日本国内での「社会」の噴出と、中国革命の進展や、新しい国際秩序の登場とを、連関させてとらえる動向については、近年、酒井哲哉氏・米谷匡史氏・平野敬和氏らも、分析を進めているところである（『思想』九四五号・特集〈帝国・戦争・平和〉、二〇〇三年一月、および、平野敬和「帝国の政治思想」、大阪大学博士論文、二〇〇二年度）。確実に、今後盛んになってゆく研究方向の一つと思われる。

このように、三つの報告は、個別の事実発掘にはとどまらず、それぞれに独自の角度から、大正期における大きな思想動向を叙述しようとする、射程距離の長いものであった。その点で、大正思想研究の新たな出発を画する、有意義なシンポジウムであったと言える。ここでは、

それぞれの報告につき一点づつ、愚見のとらえた問題をとりあげて、総括としたい。

まず黒川氏の報告についてであるが、大山郁夫が、第一次世界大戦後の労働運動における「民衆からの問いかけ」を真摯に受けとめ、みずからの思想を大きく転回させたのは、いったいなぜだったのか、疑問が残った。この点については、黒川氏の著書『共同性の復権——大山郁夫研究』（信山社、二〇〇〇年、一五五―一五八頁）で、権田保之助からの批判に応える大山の姿に即して、「知識階級」の立場から、『知識』に与ることのできない労働者階級との間にある溝を必死で埋めようとするあがきと苦悩」と説明されており、シンポジウムの質疑応答でも、そのような回答があった。だが、大山がそのように同時代では突出して、知識人としての負い目を強烈に抱いていた背景は、いったい何だったのか。民衆の苦しみの声に直面したというだけでなく、それになぜ敏感に反応しえたのか、大山自身の実存にまで掘りさげて、明らかにする必要があるのではないか。（前掲著書の第一章には、その手がかりになりそうな記述が、数多くちりばめられている。）その作業がひるがえって、大正期のほかの思想の研究にも資するように思える。

板垣氏の報告は、大正期のアナーキストたちの自我が、

内面の閉域を超えて、他者との一体化や、万物を支える超越的なものとのつながりを、必死に求めていった姿を、多くの側面に関して描きだしている。しかしその分析は、現実の社会運動にかかわる立場としての「体制」と「反体制」の軸上への位置づけに、集中しているきらいがないだろうか。石川三四郎の前期思想における「他者との結合の希求」に関連して、報告と質疑応答では、その自由恋愛論と、幸徳秋水・菅野すがの恋愛を称賛したこと、そして大杉栄の恋愛観との対比につき、説明があった（板垣氏の著書『近代日本のアナキズム思想』、吉川弘文館、一九九五年、四六、一一五、二四六頁でも言及されている）。菅野聡美氏による『消費される恋愛論——大正知識人と性』（青弓社、二〇〇一年）が明らかにしたように、恋愛論は、この時代の知識人の多くを議論にまきこんだ、大きな思想上のトピックスである。社会の全体秩序にかかわる「反体制」の姿勢とまず一緒にするのはなく、こうした個人の身辺の領域で、他者とのつながりを模索した営みを、独自の思想課題としてとりだし、その意義を確認することも、また大事ではないか。

最後に、和田氏が報告でとりあげた永井柳太郎の、一九三〇年代以降の軌跡については、すでに同氏による紹介がある（田中浩・和田守編『21世紀の民族と国家 第一巻・民

族と国家の国際比較研究』、未来社、一九九七年、二三四―二三五頁）。一九一〇年代・二〇年代には、辛亥革命を「愛国革命であり同時に社会革命だ」と論じ、日本人の中国理解を鋭く批判した永井その人が、満洲事変の勃発ののちには、その戦争を肯定し、「大東亜共栄圏」をも賛美するようにするのである。こうした永井の論調の変化は、現実の動きに順応した「転向」を示すのか、それとも新しい「社会」の秩序の実現を、満洲国や共栄圏に期待する点で、二〇年代の主張のさらなる発展ととらえるべきなのか。大正期の思想が示す問題は、やはり、昭和期の潮流へと、さまざまな形で深くつらなつてゆく。

（東京大学助教授）